

古典的スラヴ派の言論活動

大矢 温

用語の問題一序にかえて

論を進めるにあたって、まず用語の整理をしておきたい。いうまでもなく、一般に思想史研究において思想と思想家の関係は重要な問題であるにもかかわらず、個別、ロシア思想史の場合には、この問題はあまり正面に据えて論じられたことはなかった。スラヴ派・スラヴ主義の場合にもこれは「鶏が先か卵が先か」の議論になってしまうとして¹、この点に深入りせずに大まかな定義によって研究分析が進められてきた。しかしながら個別、19世紀ロシアのスラヴ派・スラヴ主義に関しては、まず、論戦などを通して同じような見解を持つ一群の人々を「スラヴ派」と呼ぶようになった、これが始点である。この時点では「同じような見解」は綱領とか思想体系といったような凝集力をもっていなかった。たとえば「リベラル」の場合のように、モデルになる思想体系とそれを示す名称（「リベラリズム」）がすでに西欧にあって、しかる後にロシアにおいてその思想を奉じた人々を「リベラル」と呼ぶようになったのとは事情が違う²。1830年代末から A.C. ホミャコフと意見を共にし、彼の周辺で活動した人々が「スラヴ派」と呼ばれ、そして彼ら自身も自分たちを「スラヴ派」と考えた、という意味でこれらの人々は「スラヴ派」なのである。理論というよりはグループのメンバーのアイデンティティーの問題だった、と考えた方がわかりやすいかもしれない。

この時点で個々の「スラヴ派」のメンバーを結集する綱領的な理論は存在していなかった。それにもかかわらず従来、このように漠然とした一体感で結ばれた「スラヴ派」に共通する理論、主義があることを前提として、それを「スラヴ主義」、そしてその主義を信奉する人を「スラヴ主義者」と呼んできた。ここで注意すべきは、「スラヴ派」も「スラヴ主義者」もロシア語で

は「スラヴァノフィール *славянофил*」であり、両者は区別せずに使われている、ということだ。ロシア語においては両概念に区別はない。

この間の事情をさらに複雑にしているのは、「スラヴ派」と呼ばれてきたグループのメンバーも、その主張（つまり「スラヴ主義」）の内容も時代とともに変化している点である。最初に「スラヴ派」と呼ばれたのは、1830年代末のモスクワのサロンにおける論争の中で普遍的、全人類的な啓蒙に対してロシア（あるいはスラヴ）の民族性、およびその特殊性に着目して論陣を張った A.C. ホミャコフとその周辺の人々であった。このグループには、キレーエフスキー兄弟、アクサーコフ兄弟、A.И. コシエリョーフ、Ю.Ф. サマーリン、B.A. チェルカッスキー公爵などが含まれる。いわゆる「古典的スラヴ派」と呼ばれるグループである。

他方、理論的には彼らと同様にロシア（スラヴ）の特殊性に基づいた議論を展開しながらも、官許国民性の唱道者である M.П. パゴーヂンや長年ヨーロッパで生活していたためにモスクワのサロンの論戦に参加しなかった Ф.И. チュッチェフ、さらには西欧由来の社会主義理論にロシアの特殊性を接ぎ木した A.И. ゲルツェンなどは、これに含まれない³。彼らは「スラヴ主義者」であるかもしれないが、「スラヴ派」とは見做されないのである⁴。

また、「スラヴ派」という概念が理論的凝集性より活動に注目したものである以上、この「古典的スラヴ派」内部でも理論的にはかなり傾向の違った思想家が同居している。たとえば対象とする問題については、イヴァン・キレーエフスキーがもっぱら宗教と哲学の問題に没頭したのに対し、農奴改革に向けてはスラヴ派として発言しながらも、チェルカッスキー公はほとんど宗教には関心を示していない。また、議論の進め方についてもキレーエフスキー（以下、特に断りのない場合にはイヴァン）が抽象的で思弁的な議論を展開したのに対して、サマーリンやコシエリョーフはもっぱら実証的、現実的な議論展開をしている。

さらにまた、時代によって彼らの問題関心が変化していることも「スラヴ主義」を定義する際の障害となっている。中でも 1861 年の農奴解放令は大きな

画期となった⁵。農民のプロレタリアート化を防ぐロシア古来の制度として農村共同体に注目し、その保持を主張してきたスラヴ派は、61年の農奴解放令以降、内政的にはゼムスキー・ソボール、そして対外的には汎スラヴ主義へと論点を展開していくのだった⁶。

農奴解放令を画期とした軸足の移動が「スラヴ主義」という思想の統一性、継続性に問題を投げかけているのと同時に、クリミア戦争終結から農奴解放令に至る変動期に「古典的スラヴ派」の主要なメンバーが相次いでこの世を去ったことは、「スラヴ派」というグループの構成員の一貫性についても問題を投げかけている。クリミア戦争終結直後の1856年にはキレーエフスキー兄弟が相次いで病死し、また農奴解放令を控えた1860年末にはホミャコフがコレラで、コンスタンチン・アクサーコフが肺結核でそれぞれ病死している。残されたサマーリンが1819年生まれ、イヴァン・アクサーコフが1823年生まれ、そしてチェルカッスキー公が1824年生まれなので、古い世代の「古典的スラヴ派」は1806年生まれのコシエリョーフだけ、ということになる。理論面だけでなく、メンバーの面でもこの時期をもって「古典的スラヴ派」の終期と考えるべきであろう。

さて、「スラヴ主義」を抽出するに当たってはこのような問題があるわけだが、本論では農奴解放令に至る時期に「スラヴ派」と呼ばれたグループ、つまり「古典的スラヴ派」を対象に、時期とメンバーを区切ってこの問題にアプローチする。個別思想家の理論を抽象化し、そこから「スラヴ主義」を導出するのではなく、いかなる活動を通して「古典的スラヴ派」と呼ばれるグループが実体化したのか、いかなる活動をしたが故に彼らが「古典的スラヴ派」という一つのグループとしてみなされたのか、を分析する。具体的には30年代末に「スラヴ派」と呼ばれるグループが発生してから農奴解放令に至る時期に、彼ら「スラヴ派」と呼ばれる人々が関係した出版事業を素材にして、彼らの活動を分析することからこの問題にアプローチすることにする。「スラヴ主義」を理論的に抽出する前段階の作業として、「(古典的)スラ

ヴ派」と呼ばれた人々の活動を跡付け、それによって「スラヴ派」というグループを個体認識するのが本論の目的である。

I 「古典的スラヴ派」の発生

1836年に雑誌『テレスコープ』にチャダーエフの「哲学書簡」が「闇夜にひびいた銃声」⁷のごとく発表されたのを契機として、ロシアの知識人社会において西欧とロシアの問題が、主にロシアの後進性という点から論議されるようになる。主に西欧との比較においてロシアの後進性が論じられ、そしてその先にはニコライ治世のロシアに対する批判が展開していた。これが「西欧派」と呼ばれる人々の立ち位置であった。

一方で、現実の西欧社会に対する批判もまた生み出された。これがスラヴ派の視座である。おそらくはドイツ・ローマン主義哲学や当時ヨーロッパで高揚したナショナリズムの影響によってであろうが、このような視座から西欧に対するロシアの特殊性、優位性を主張するスラヴ主義の視点が導き出される。

このスラヴ主義的観点が原初的な形で現れた時期については、それを1838年から39年にかけての冬とするのが一般的である⁸。モスクワのサロンにおける論争の中で、39年にホミャコフがキレーエフスキーへの反論として自らの「正教—スラヴ的」傾向を、論文「古きものと新しきもの」において「ほかの世界とは違うルーシの地（ゼムリヤ）」の2つの原理、つまり「1.人民と睦まじい政府権力、2.純粋で啓蒙された教会の自由」として、多分に素朴で復古的なものではあったが、提示したからである⁹。この論文においてホミャコフは、ローマ教会への敵意¹⁰、人民の意志と反したピョートル大帝によるペテルブルク建設¹¹、西欧の王朝と違う非征服王朝¹²、と後のスラヴ主義に特徴的な諸論点を提示しながらその議論を展開している¹³。

ほどなくホミャコフを中心に¹⁴、キレーエフスキー兄弟¹⁵、コンスタンチン・アクサーコフ、Д.А. ヴァルナーエフなどが「スラヴ派」と呼ばれるグループを形成し、「西欧派」と呼ばれるグループと対立するようになった¹⁶。この

ようにして形成されたグループに、さらにコシエリョーフ、サマーリン、チエルカッスキー公、そしてイヴァン・アクサーコフらが加わって、本論で対象とする、いわゆる「古典的スラヴ派」のグループが形成され、彼らはともに農奴解放令に至るまでの「初期スラヴ主義の時代」に行動を共にしたのであった。

ただし、このスラヴ派と西欧派の二つのグループは、モスクワのサロンにおいて論争を展開していた 40 年代前半には、後にゲルツェンが「異なる方向を見てはいたが、鼓動する心臓は一つであった」と回想しているように¹⁷、共通する問題意識のもとに相互の尊敬と友好的な雰囲気の中で論争を展開していた。両派ともニコライ治世の抑圧的な社会からの出口を求めるという点では共通の志向を有していたのだ。しかしやがて両派の主張の隔たりが明確になるにつれ、共通の議論の土台は失われ、理論的な対立は個人的な感情の対立へと発展した¹⁸。西欧派には妥協を知らない B.Γ. ベリンスキーがいたし、スラヴ派には彼と同じ程度に寛容を知らぬコンスタンチン・アクサーコフがいた。「越えることのできない枯谷」が両派を分かった、と当時西欧派に属しながらもスラヴ派との関係修復を願っていたゲルツェンは 1844 年 6 月 4 日の日記に書き残している¹⁹。

このような両派の論戦の歴史において、西欧派の T.H. グラノフスキーがモスクワ大学で公開講座を開き、そこでスラヴ派を公然と攻撃したことは一つの画期となる事件だった。グラノフスキーは 1839 年にモスクワ大学に就任した世界史の教授だったが、他方、やはりモスクワ大学の教授だったパゴーチンはその雑誌『モスクワ人』の誌上でグラノフスキーの西欧主義を攻撃し始めた。これに対して西欧派もまた雑誌『祖国雑記』を使って反論を展開した。この時期、私的なサロンにおける論戦は、モスクワの上流社会を対象とした大学の公開講義、さらにはロシア全土の読者層を対象とした雑誌へと短期間に、そして大幅にその公共圏を拡大したのだ。

II 「古典的スラヴ派」の出版活動

II-1 『モスクワ人』

西欧派とスラヴ派の論戦がサロンから雑誌へのその舞台を移すにつれ、古典的スラヴ派のグループは自説を出版してそれを世に問おう、と望むようになった。特に 1944 年から 45 年にかけての冬に西欧派の雑誌と目された『祖国雑記』を当時編集していたネクラーツフが、ベリンスキーやゲルツェン、そしてパナーエフらの作品を『ペテルブルク文集』として出版することを計画していることが伝わると、古典的スラヴ派のグループ内でも自説出版の機運が高まった。モスクワのサロンにおける論争の時のように、各人が自分の得意分野から自説を發表することができる、そんな刊行物が必要だった。たしかに 1841 年創刊のパゴーゼンの雑誌『モスクワ人』はロシア史やロシア文学に関する論文を發表しスラヴ主義的な傾向から紙面を構成していたが、古典的スラヴ派のグループはそれとは別の、自分たちの出版物を欲したのだった。すでに指摘したように、「イズム」として理論面から考えた場合、スラヴの特殊性やロシア独自の民族性といった点で多くの共通点を持つにもかかわらず、現状のニコライ治世下のロシア社会に対する評価において、ニコライ治世下の社会に息苦しさを感ずる古典的スラヴ派のメンバーと、パゴーゼンや C.П. シェヴィリョーフなど、「官許国民性の擁護者」との間には溝があったのだ。

この溝は『モスクワ人』の編集を巡って表面化した。当時この『モスクワ人』、事実上唯一のスラヴ主義的な出版物ではあったが、とりとめもないロシア古代史に関する解説や脈絡のない資料公開など、必ずしも一般読者向けの雑誌ではなく、編集者のパゴーゼン自身もこの低迷を続ける雑誌の発行に対する熱意を失っていた。かくして自らの雑誌を必要とした古典的スラヴ派と雑誌の立て直しを図りたいパゴーゼンの思惑が一致して、キレーエフスキーが『モスクワ人』の編集権を買い取る交渉がはじまった²⁰。

実はキレーエフスキーは 1832 年に雑誌『ヨーロッパ人』を出版した経験を持っていた。彼はかつて自らもそこに属し、シェリング哲学を研究したことがある、「愛智会」の昔のメンバーを中心に 1832 年からこの雑誌を発行した。

ただし、この雑誌は最初の2号を発行した後、廃刊となっている。雑誌の創刊号に掲載された彼の論文「19世紀」が問題となり、発禁処分となったためである²¹。また、それに伴って、彼自身も監視下に置かれることになったのだった。

ともあれ 1845年の第1号から、ホミャコフから編集権を買い取ったキレーエフスキーの編集の下で、『モスクワ人』が発行されるようになった。ところがこれは長く続かなかった。45年の第3号を最後に、キレーエフスキーは雑誌の編集から手を引いてしまうのだった。これは編集権買収交渉において、キレーエフスキーに編集権を譲渡しつつも、パゴーゼンは公式の出版者として、つまり雑誌の責任者として残ったからである。上記のような理由で要注意人物となったキレーエフスキーは検閲上の理由で雑誌の出版者となることはできなかったのだ。雑誌の表紙に掲げられた「パゴーゼン発行の雑誌」という表書きもそのままだった。その上、パゴーゼンは雑誌の責任者としてキレーエフスキーの編集に「政治的な干渉」をしてきた²²。自らの雑誌を求めたキレーエフスキーがそれ故、雑誌『モスクワ人』から手を引くのも当然だった²³。

とはいえ、古典的スラヴ派にとって自分たちの出版物は不可欠だった。パゴーゼンの『モスクワ人』以外にも彼らは 1835年創刊の『モスクワの観察者』や 43年に創刊され П.Г. レトキンおよび Д.А. ヴァルナーエフが編集した『養育のための文庫』に論文を発表していたが、西欧派との論戦が激化したこの時期、彼らはスラヴ主義を掲げる、しかも古典的スラヴ派のグループの固有の出版物を必要としたのだった。たしかにこの時期、П.А. ヤジィコフ、ヴァルナーエフとともにホミャコフが出版者に名を連ねた『シンビルスク文集』が 1845年に、同じく 45年にヴァルナーエフによって『ロシアおよびそれと同信仰、同人種の民族に関する歴史および統計情報集』が発行されたのが²⁴、それらはモスクワを中心とする古典的スラヴ派のグループを満足させるものではなかった。

II-2 『モスクワ文集』

そのような中で当初コンスタンチン・アクサーコフは小冊子を発行することを計画していたようだが²⁵、結局「文集」の形で自分たちの作品や論文を発表することにする。編集を担当したのは B.A. パノフ。彼はセルゲイ・アクサーコフの兄ニコライ・アクサーコフの義理のおいに当たるためアクサーコフ一家と親しく²⁶、また、アクサーコフ一家のところで作家のゴーゴリと知り合い、彼の『死せる魂』執筆を秘書として助けたこともあって編集者としても適任だった。

ただしこれはスラヴ主義の理論誌ではなかったし、キレーエフスキーも参加しなかった。あくまで『ペテルブルク文集』に対抗した『文集』だった。しかも部数も伸びなかった。46年当時、西欧派の雑誌とされた『祖国雑記』の定期購読者数が4000だったのに対し、この『モスクワ文集』の発行数は300部にすぎなかった²⁷。「そこに書かれた言葉は社会にいかなる影響も与えなかった」²⁸。結局『モスクワ文集』は46年と47年に2回出版されただけで廃刊となる。しかもその直後にヨーロッパから革命的動乱のニュースが届くと、ニコライ一世の思想統制は一層厳しさを増した。49年3月には父親への手紙の内容が「リベラル的」であるとしてイヴァン・アクサーコフが、つづいてその「リガからの手紙」の故にサマーリンが逮捕された。スラヴ派は「赤ではなく真っ赤、改造者ではなく破壊者」²⁹としての嫌疑をかけられていたのである。そのような状況でさらに4月に内務省によってロシアの民族衣装を着用すること、およびあごひげを蓄えることを禁じられると、スラヴ派は言論活動に対して消極的とならざるを得なかった³⁰。上述のようにキレーエフスキーは『ヨーロッパ人』に続く『モスクワ人』の失敗に気落ちしたのか、『モスクワ文集』にすら参加しなかった。コシェリョーフは自らの領地経営に没頭していた。もとより古典的スラヴ派のメンバーは誰一人として大学の講座も持っていなかった。総じてこの時期、スラヴ派のグループを結集する「スラヴ主義」という理論も定式化されず、スラヴ派の主張が世論に与える影響も

ごく限られたものだった。不動のニコライ治世の下でスラヴ主義は停滞を余儀なくされたのだった。

そのような否定的な状況の中で、当時内務省 7 等官の職を辞してモスクワに戻っていた若いイヴァン・アクサーコフだけが活動の場を探していた。そのイヴァンに「活動の場」を提供しようと申し出たのはコシェリョーフだった。おそらくは自らの農業経営のための視察であろう、1851 年のロンドン万国博の視察から帰ったばかりだったコシェリョーフはイヴァンをジャーナリズムの世界へと誘ったのだった³¹。長らく中断していた『モスクワ文集』が再開された。出版者はコシェリョーフ、編集者はイヴァンだった³²。

後のコシェリョーフはこの文集発行について、「そこでたとえ部分的とはいえど、様々な問題についてのわれわれの意見を述べる」ことができるような文集を、力を合わせて発行した、と回想している³³。実際のこの『文集』には古典的スラヴ派のメンバーによる、さまざまな分野の記事が寄せられている。古典的スラヴ派が久しぶりにグループとしての結束を示したのであった。この文集には「われわれ」、つまりホミャコフ、キレーエフスキー兄弟、アクサーコフ兄弟、そしてコシェリョーフなど、主に古典的スラヴ派のメンバーを中心とした人々が寄稿した。古典的スラヴ派のグループは、それぞれ自分の記事を持ち寄って、共同の「われわれ」の『文集』にまとめ、それを発表することを欲していたのである。とはいえ、古典期スラヴ派のグループだけがこの『文集』の誌面を独占したわけではなかった。「プスコフとリヴォニア」を寄稿した C.M. ソロヴィヨフなどは古典的スラヴ派のグループのメンバーではなかったが、記事の内容がスラヴ派的なものであったために掲載されている³⁴。このように、この『文集』に統一的な綱領や活動の目的があったわけではなく、一般的な傾向が示されたのみであった。そこには多様な内容の記事が寄せられたのだ。イヴァン・キレーエフスキーの抽象的な宗教、哲学論からホミャコフやイヴァン・アクサーコフの詩、ピョートル・キレーエフスキーが収集した民謡からコシェリョーフによるパリ万国博の見聞記に至るまで³⁵、著者の個性を反映してさまざまな種類の記事が掲載されたのだった。

記事の多様性が読者層の受け入れられたのか、売れ行きも良く、4月21日に発売されると月末までには350部が売れ、さらにペテルブルクからも引き合いがあった³⁶。

巻頭の「序言」でも謳われている通り、この『文集』は年4回発行の予定であった。ところが第1号を出版しただけで発禁処分となってしまう。キレーエフスキーの論文「ヨーロッパの啓蒙とそのロシアの啓蒙に対する関係について」がその原因といわれているが³⁷、その後、キレーエフスキーのみならずホミャコフ、アクサーコフ兄弟、そしてこの雑誌には寄稿していないチェルカッスキー公までもが事実上の執筆禁止処分に処せられているので³⁸、政府が問題視したのは一人キレーエフスキーの論文だけではなく古典的スラヴ派のグループの一般的な思想傾向だったと考えられる³⁹。ニコライ治世の末期、またしても古典的スラヴ派のメンバーは沈黙を強いられたのであった。

II-3 『ロシアの談話』

ところで、クリミア戦争の敗色が濃厚となる中で1855年3月にニコライ一世が死去したことは、このような状況を大きく変えた。即位直後の新帝の方針はまだ不明だったが、人々はまず、弾圧のニコライ治世が終わったことに胸をなでおろし、新帝の下での自由を祈念した。コシェリョーフはホミャコフ、キレーエフスキーらとともに「新帝の健康のために乾杯し、心から彼の治世において農奴の解放とゼムスキー・ドゥーマの招集が実現することを祈った」⁴⁰。世論に改革について論じ、活動するための可能性が開かれたのであった。ホミャコフはこの機を逃さず、「文学活動と雑誌出版の必要性」を古典的スラヴ派のメンバーに訴えた。イヴァン・アクサーコフは「まだ雑誌について考える時期ではない」と考えたが⁴¹、コンスタンチン・アクサーコフ、コシェリョーフ、そしてサマーリンはホミャコフの案を支持した。かくしてグループとしての活動が始まったのだった。

当初、またしてもパゴージンの『モスクワ人』を再び買収することが検討され、コシェリョーフ、サマーリンとパゴージンとの間で交渉が進んだ。他方、

8月になると西欧派もまた彼らの新雑誌『ロシア通報』を準備していることが伝わってくる⁴²。これに対抗する意味でもスラヴ派の独自性をアピールする必要がある。旧来の雑誌を使うのではなく、自分たちのメンバーが出版、編集する新しい雑誌を創刊することが必要であった。かくしてホミャコーフを中心に新雑誌の発行許可へむけた工作が始まった。当初ホミャコーフはコシエリョーフのまたいとこの A.C. ノロフが 53 年に文部次官から文部大臣に昇任したため、彼の好意的な配慮に期待をかけていたが、この新任の文部大臣は新雑誌の創刊を許可しなかった。ホミャコーフによる文部大臣経由での新雑誌発行許可計画は挫折した⁴³。

結局、55 年の暮れからホミャコーフ自身がペテルブルクに出向いて検閲関係者や政府高官に雑誌発行の意義を説明することになった。検閲官の A.B. ニキテンコや宮廷女官の A.Φ. チュッチェヴァは、ロシアの民族衣装を身にまといあごひげを蓄えたホミャコーフがペテルブルクの上流社会に現れて「フランス語で会話した」様子を伝えている⁴⁴。ホミャコーフが唱道する「ロシアの民族性」がペテルブルク上流社会の耳目を集めることになったのだ。常識的に考えれば政府の側が疑いの目をもってスラヴ派を見ているところへ、そのようないでたちで現れることは逆効果になるのだが、いかにもロシアの農民然とした「奇妙な客人」の風体はかえってドイツ・ダルムシュタット出身の皇后マリア・アレクサンドロヴナの興味を引くこととなった。スラヴ派に対して年明け早々に「検閲の失寵」が解かれることとなったのも、それが原因といわれている⁴⁵。それまでペテルブルクの検閲総局への原稿の提出を義務付けられていたスラヴ派は、これによって通常の検閲に戻されたのである。ただしこれをもって政府がスラヴ派に対する警戒を解いたわけではなく、新帝が即位の儀式のためにモスクワに行幸することが決まると、モスクワ県知事将軍の A.A. ザクレフスキーは、49 年に続いて、またしてもホミャコーフとコンスタンチン・アクサーコフに対して、ロシア服を着て公衆の場に現れないこと、およびあごひげをそる旨、宣誓書を書かせている⁴⁶。

ともあれ 56 年 2 月に新雑誌刊行が許可される。雑誌の名前は『ロシアの談話』、年 4 回の発行とされ、ホミャコフ、サマーリン、そしてチェルカッスキー公がそれぞれ 20% ずつ、そしてコシェリョーフが 40% を出資し、コシェリョーフが出版者兼編集者となった⁴⁷。ただし、ここで注意する必要があるのは、この雑誌があくまでも「スラヴ派」の雑誌であって、「スラヴ主義」の雑誌ではなかった点である。雑誌発行の中心人物の間にも「スラヴ主義」という共通のイズムは存在せず、むしろ「古典的スラヴ派」の時代からの人間関係がこのグループを結び付けていた。たとえばチェルカッスキーは他のメンバーと「もっとも本質的な信念」において袂を分かっていた。正教の優位、農村共同体論、ロシア古代史の理解、といった「スラヴ主義」というイズムの根幹となるような部分で意見を共有していなかった、というのだ。コシェリョーフの回想によれば、彼は「正教的キリスト教信仰をわれわれの世界観の基礎とは全く考えず、農村共同体に対しては絶えず反対し、好んでホミャコフやコンスタンチン・アクサーコフが崇拜する民族的英雄を笑いものにした」が、「彼は我々との会話や我々との交流に特別の満足を見出していた」という。彼らにとっては「スラヴ主義者」という理論的な凝集性よりは「スラヴ派」という人間的なつながりの方が重要だったのだ。コシェリョーフはチェルカッスキーを雑誌に加えるにあたって、雑誌の出版者兼編集者として彼の論文の中から「われわれの傾向に反するもの」を削除、訂正する権利を認めさせてはいるが⁴⁸、それにもかかわらずチェルカッスキーの「1855 年のヨーロッパ政治情勢の概観」と題するクリミア戦争をめぐるヨーロッパの政治情勢を分析した記事の掲載は拒否していない。

創刊号の巻頭言で述べられているように、『ロシアの談話』は「友人たちとの夕べ」における「人間の談話」のように、仲間内で型式に縛られずに発言する場であった。モスクワのサロンにおける談話のように、ロシアの文化や歴史、他のスラヴ系諸民族について、そして「ヨーロッパ啓蒙の空精神 Пустодушие Европейского просвещения」について語り合う場であった⁴⁹。そしてまさにこの雑多性こそが、のちにスラヴ派の関心が農奴解放や汎スラヴ

主義、そして地方自治等、多様な諸問題に展開する際にその萌芽となっているのである。

とはいえ、そもそもこの古典的スラヴ派のグループ自体、西欧派に対する批判によって結ばれた人々のグループだったので、当然、彼らの雑誌『ロシアの談話』誌上でも西欧派に対する論争が展開することになった。創刊号の「学問欄」に掲載されたサマーリンの「学問における民族性について一言」⁵⁰は、「全人類的な学問と芸術」を主張する『モスクワ通報』に「ロシアの学問と芸術」の立場から反論したものである⁵¹。「その他」欄に掲載されたコンスタンチン・アクサーコフの「ロシア的見解について」⁵²も同じく「全人類的見解」を受け入れられない「スラヴ派と呼ばれる人々」の立場を表明したものだ。この議論は第2号に掲載されたキレーエフスキーの「哲学のための新原理の必要性と可能性」⁵³に引き継がれ、『モスクワ報知』をはじめとする他誌との論戦へと発展した⁵⁴。ただしキレーエフスキーは1856年7月にコレラによって病死してしまうので、この論文の続編は書かれないうままになってしまった。

ロシアの農村共同体を巡っても『ロシアの談話』は他誌との論争を展開した。『ロシアの談話』創刊号に掲載されたベルジャーエフの「ロシアにおける農村共同体の発達史概観」⁵⁵は、農村共同体の起源に関するB.H. チチェーリンの同名の論文を批判したものだ⁵⁶。結局、農村共同体を巡った『ロシアの談話』と『ロシア通報』の論争は56年の末まで続いた。さらに57年の1号にはチチェーリンの学位論文「17世紀ロシアの地方制度」を批判するサマーリンの「チチェーリン氏の歴史業績に関して数語」⁵⁷が掲載された。ロシアにおける鉄道網の整備に関してコシエリョーフが著した「鉄道に関する2論文」⁵⁸は『現代人』などの鉄道網建設計画を批判したものだ。

その他、56年10月発行の第3号に掲載されたB.B. グリゴリエフの「モスクワにおける教授職就任までのグラノフスキー」⁵⁹は、西欧派のグラノフスキーが同じく10月に死去したばかりだったこともあって、「彼に対する不敬」の故に『ロシア通報』など、西欧派の怒りを買った⁶⁰。

しかしながら、「大改革」を控えたこの時期、最も重要な問題は農奴制の改革であった。共同体を巡るチチャーリンとの論争も、それが単なる学問的な論争以上の意味を持ち、人々の興味を引いたのは、それが来るべき農奴制改革において農村共同体をどうするか、という問題にかかわっていたからである。まさにそのような問題関心を直截に示したのが、1857年第4号に掲載されたコシェリョーフの「義務労働から雇用労働への転換、および共同体的土地所有から私有への転換についての雑誌論文に関して」⁶¹であった。ナジーモフ宛て勅書によって農奴解放に向けたツァーリ政府の方針が示されるのが57年11月のことであるので、この時期はまだ公式の議論は許されていなかったはずだが、それにもかかわらずコシェリョーフは、土地のない農民を「水のない魚」にたとえつつ⁶²、土地付きの解放を訴えたのだった。

II-4 『世評』と『農村の整備』

雑誌間での議論が白熱する中で、スラヴ派は年4回発行の『ロシアの談話』より発行回数の多い、論争向けの刊行物を必要とするようになった。そのため1857年4月に「文学新聞」として創刊されたのが週刊新聞『世評』であった⁶³。検閲上の理由から И.Д. ベリャーエフが公式の出版者、公式の編集者は C.M. シュピレフスキーという人物であったが、実質的な出版者はコンスタンチン・アクサーコフ、編集も実質的には彼が取り仕切り、毎号の巻頭論文も彼の筆によるものだった⁶⁴。コンスタンチンは創刊号の巻頭論文で「論争と闘争は自立した人間に不可分な特性である」と宣言し、この新聞を論争用の新聞と位置づけたが、このような激しい調子はただちに検閲当局の注意を引くこととなり、年末には廃刊となってしまった。そもそもこの『世評』という名前は、かつて愛智会が『テレスコープ』の後継として出版していた文集の名前と同じである。ここからもコンスタンチンが愛智会以来のモスクワのサロンにおける討論の伝統を強く意識していたとこがうかがえる。とはいえ、この新聞の著者名の中にコシェリョーフやサマーリン、そしてチェルカスキーの名前を認めることはできない。おそらくコンスタンチンの論争的な性

格を危険視したことと、より現実的な問題、つまり農奴解放に関する問題に彼らの関心が移っていたためと思われる。

さて一方で、このように農奴制改革が焦眉の問題となったこの時期、農奴解放に関するより具体的な問題について審議するために『ロシアの談話』の別冊という形でコシェリョーフを発行者兼編集者として 1858 年 3 月から刊行されたのが月刊誌『農村の整備』であった。すでにキレーエフスキー兄弟は 1856 年に相次いで病死していたし、コンスタンチン・アクサーコフは『世評』の廃刊以後、沈黙していた。古典的スラヴ派のグループからはコシェリョーフとサマーリンが中心になって、農奴解放についてより現実な問題を審議することになった。雑誌の方針として「さまざまな思想の種類の人々お互いに語り合い、自らの知識、意見、疑問、当惑を開陳する機会を与える」⁶⁵ことが謳われた。この雑誌の巻頭言においてコシェリョーフは「地主」に向けて「共通の意見」の形成を呼びかけた⁶⁶。スラヴ主義にまつわる理論的な考察よりも、農奴解放に関する実質的な審議を優先しようとしたのである⁶⁷。そのうえで持論として彼らはこの雑誌の誌上において農村共同体を保持しながらの土地付きの農奴解放の論陣を張ったのだった。このようにコシェリョーフが『農村の整備』に軸足を移したため、『ロシアの談話』の方はイヴァン・アクサーコフが実質的な編集者となった。

ただし、この『農村の整備』は 58 年の末から検閲が強化され、それによって発行が遅れ気味となり、結局 59 年の 2 月号（通算 14 号）をもって廃刊となってしまった。59 年 3 月に政府が農奴解放委員会を組織してそこで農奴解放の問題を審議するようになったために、政府以外の場所で農奴改革について論じることを政府が望まなかったのがその原因と思われる。他方、スラヴ派のグループとしてもサマーリンとチェルカッスキーがこの農奴解放に関する法典編纂委員会に「専門家・委員」として招かれていたので、誌上での討論にこだわる必要はなかったのかもしれない⁶⁸。

そのような中で 1860 年にホミャコフとコンスタンチン・アクサーコフが相次いで病死したことは古典的スラヴ派の出版活動に大きな打撃を与えた。

古典的スラヴ派は活動の中心を支えた二人のリーダーを失ったのみならず、残されたコシェリョーフもホミャコフの領地の管理と彼の家族の世話に忙殺された。『ロシアの談話』もまた、1860年の第2号をもって廃刊となったのであった。

むすび

ニコライ一世の治世が終わり、アレクサンドル二世の下で一連の改革が準備される50年代の末、改革に向けた社会情勢を背景として、理論的には多様性を含みながらも40年代のサロンの伝統を引きずる個人的な関係によって結ばれていた古典的スラヴ派の前に出版活動という活動の場が開かれた。かつてのロシア史を巡る論争を背景としながらも、コシェリョーフやサマーリンは、「大改革期」という新しい時代に農奴制改革から地方自治、さらにはゼムスキー・ソボール論へと、新しい舞台に議論を展開することになる。他方、イヴァン・アクサーコフは、自らのスラヴ民族に関する関心を新しい時代のなかで汎スラヴ主義へと展開した。古典的スラヴ派は理論的にはこの時期に一つの転機を迎えるのである。

他方、メンバーの面でも古典的スラヴ派のグループは、キレーエフスキー兄弟がすでに56年に相次いで病死し、60年にはホミャコフとコンスタンチン・アクサーコフも同様に相次いで病死している。理論の面からも、そしてメンバーの面からも古典的スラヴ派は61年の農奴解放令を前に一つの時代を終えたのであった。

本論において、古典的スラヴ派と呼ばれる人々が彼らの雑誌に発表した個々の論文の内容の分析には踏み込めなかった。また、コシェリョーフらが農奴解放令以後の地方自治からゼムスキー・ソボール論へ展開する過程も対象としていない。稿を改めて論じるべきテーマである。

注

- ¹ 清水昭雄「ソ連邦におけるスラヴ主義研究の近況について」『一橋論叢』、1989年第101(2)号、225頁、および同「古典的スラヴ主義」とは何か『ロシア思想史研究』2007年第4号、70頁参照。
- ² 大矢温「書評：杉浦秀一著『ロシア自由主義の政治思想』」『ロシア史研究』1999年第65号、参照。
- ³ 「古典的スラヴ主義」として理論面からこの問題にアプローチした清水氏は「古典的スラヴ主義」を1.「官許民族性」を擁護した思想ではなく、2.西欧起源の原理のロシア的変種でなく、3.古くから根差した「ロシア(スラヴ)的」要素。と定義している。清水昭雄「古典的スラヴ主義」、69頁参照。
- ⁴ バゴージンとシェヴィリョーフはチュッチェフらとともにライチの文学サークル、イヴァン・キレーエフスキーはコシエリョーフらとともに「愛智会」に参加していた。「愛智会」以来のスラヴ派の人間関係を考慮すると、こういった点も彼らがスラヴ派とみなされなかったことの一因かもしれない。Кошелев А.И. Записки / Сост. Цибаева Н.И. МГУ, 1991. С. 50-51.
- ⁵ 研究者の間では1861年の農奴解放令を「初期スラヴ主義の終期」とする見解が一般的である。たとえばツインバーエフはスラヴ主義の歴史を4期に区切りながら、農奴解放令をもって「初期スラヴ主義の終焉」としている。Цимбаев Н.И. Славянофильство. МГУ, 1986. С. 86-88.
- ⁶ 汎スラヴ主義へ傾倒していくイヴァン・アクサーコフの出版活動については、大矢温「クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフスラヴ主義から汎スラヴ主義へ」、2008年11月、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』69号、および同「二つの千年紀とイヴァン・アクサーコフ」2010年6月、日本ロシア思想史学会『ロシア思想史研究』第1号(通算第5号)を参照。
- ⁷ アレクサンドル・ゲルツェン著金子幸彦・長縄光男訳『過去と思索Ⅱ』筑摩書房、1999年、37頁。
- ⁸ Цимбаев. Славянофильство. С. 86.
- ⁹ Хомяков А.С. О старом и новом // Полное собрание сочинений. М., 1900. Т. 3. С. 11.
- ¹⁰ Там же. С. 14.
- ¹¹ Там же. С. 26.
- ¹² Там же. С. 28.
- ¹³ ホミャコフに対するキレーエフスキーの『返答』については、勝田吉太郎『近代ロシア政治思想史』創文社、昭和52年、508頁参照。
- ¹⁴ ヴァリツキはイヴァン・キレーエフスキーを「スラヴ主義教義の創設者」とし、哲学的にスラヴ主義の概念を構築したのはイヴァンであるとしながらも、「スラヴ主義運動」という面でホミャコフは「指導者であり、組織者であり、伝言者であった」と評価している。Andrzej Walicki, *The Slavophile Controversy*, Univ. of Notre Dame Press edition, 1989, p.181.
- ¹⁵ 西欧派からスラヴ派へのキレーエフスキーの「改宗」については長縄光男「前期キレーエフスキイの思想」、金子幸彦編『ロシアの思想と文学』恒文社、1977年所収、参照。
- ¹⁶ См. Цимбаев. Славянофильство. С. 87.
- ¹⁷ ゲルツェン『過去と思索Ⅱ』、72頁。

- ¹⁸ 1843年の夏に流刑先からモスクワに戻ったゲルツェンがモスクワのサークルで見たものは「完全な戦闘態勢を整え」た「二つの陣営」の「対峙」であった。同上、51頁。
- ¹⁹ *Герцен А.И.* Дневник от 4-го июня 1844 г. // *Собрание сочинений в 30-и томах.* М., 1954. Т. 2. С. 256.
- ²⁰ この間の事情については、下記を参照。См. *Пирожкова Т.Ф.* А.И. Кошелев – «главный распорядитель» журнала «Русская беседа» // «Русская беседа»: история славянофильского журнала / Под ред. Егорова Б.Ф. и др. СПб., 2011. С.11- 12.
- ²¹ 勝田『近代ロシア政治思想史』、497頁参照。
- ²² この間の事情については、下記を参照。См. *Варсуков Н.* Жизнь и труды М. П. Погодина. С-Пб., 1893. Т. 7. С. 401-408.
- ²³ この間の事情については、下記を参照。См. *Пирожкова Т.Ф.* Славянофильская журналистика. МГУ, 1997. С.24-41.
- ²⁴ 『シンビルスク文集』および『歴史および統計情報集』については、以下を参照。См. *Пирожкова.* Славянофильская журналистика. С.42-62.
- ²⁵ См. Там же. С. 63.
- ²⁶ См. Там же. С. 66.
- ²⁷ *Аксаков А.И.* Письмо от 22-го февраля 1856 г. // *Письма к родным 1849-1856.* М., 1994. С. 426.
- ²⁸ *Самарин Ю.Ф.* Письмо от 9-го октября 1847 г. // *Сочинение.* М., 1911. Т. 12. С.253.
- ²⁹ *Кошелев А.И.* Записки. С. 97.
- ³⁰ *Цимбаев.* Славянофильство. С. 131.
- ³¹ *Аксаков.* Письмо от 8-го октября 1851 г. // *Письма к родным 1849-1856.* С. 217.
- ³² コシェリョーフが出版活動に乗り出した動機として前年2月に彼のまたいこの А.С. ノロフが文部省次官に任命されたことが挙げられる。См. *Пирожкова.* Славянофильская журналистика. С. 106. しかし、それは出版に至る障害がなくなった（あるいはなくなる可能性があった）、という消極的な理由であって、積極的な動機ではないように思われる。この後コシェリョーフが自らの見聞記を別の冊子として印刷しているように、この時の彼を突き動かしたのは自説、具体的には近代技術のロシア農村への適用、の宣伝だったと考えるのが妥当であろう。*Кошелев А.* Поездка русского земледельца в Англию и на всемирную выставку. М., 1852.
- ³³ *Кошелев.* Записки. С. 93.
- ³⁴ *Соловьев С.М.* Пусков и Ливония // *Московский сборник.* М., 1852. С.245-316.
- ³⁵ ロンドン万博の会場で目にした水晶宮に代表されるヨーロッパの近代技術と生産力は、コシェリョーフを「打ちのめし」「その場にきぎ付けにした」。*Кошелев А.* Поездка русского земледельца в Англию и на всемирную выставку // *Московский сборник.* М., 1852. С. 161. *Кошелев.* Записки. С. 93. 彼は農業機械のデモンストレーションに参加しマッコーミックの刈り取り機をはじめとして農業機械を買い入れ、ロシアで実験している。*Аксаков.* Там же.
- ³⁶ *Аксаков.* Письмо от 28-го сентября 1852 г. // *Письма.* С. 240.
- ³⁷ «Киреевский, Иван Васильевич». СИЭ. М., 1965. Т. 7. С. 278.
- ³⁸ 1853年から通常のモスクワの検閲委員会ではなく、ペテルブルクの検閲総局の許可が必要となった。См. *Пирожкова.* «Главный распорядитель». С. 12.
- ³⁹ 1853年3月にはノロフは文部次官から文部大臣、つまりこの処置の責任者に昇進しているので、上述のコシェリョーフの期待は空望みだった可能性がある。

- ⁴⁰ *Кошелев*. Записки. С. 94. 西欧派のチチェーリンもニコライの死について「すべてを押し潰し、誰にも呼吸させない巨像が崩れ落ちたように思えた」と回想している。*Чичерин Б.Н.* Воспоминания Болиса Николаевича Чичерина: Москва сороковых годах. М., 1929. Republished in 1973. Cambridge. С. 153.
- ⁴¹ *Аксаков*. Письмо от 7-го апреля 1855 // Письма. С. 342. とはいえ、イヴァンも『ロシアの談話』創刊号には3篇の詩を投稿している。
- ⁴² カトコフ編集の『ロシア通報』は1855年5月に出版許可を文部大臣ノロフあてに提出すると、10月の初めには許可されている。См. *Кошелев В.А.* К истории возникновения «Русской беседы» // «Русская беседа»: история славянофильского журнала / Под ред. Егорова Б.Ф. и др. СПб., 2011. С. 50.
- ⁴³ その原因として、新任の文部大臣にして国务会議の議員にもなったノロフはスラヴ派に関して自分のキャリアに傷がつくのを恐れたことが指摘されている。См. *Пирожкова*. Главный распорядитель. С. 15.
- ⁴⁴ *Никитенко А.В.* Дневник от 20-го января 1856 г. // Дневник. ГИХЛ., 1955. Т. 1. С. 429; *Тютчева А.Ф.* Дневник от 13-го января 1856 г. // Воспоминания. М., 2000. С. 239.
- ⁴⁵ См. *Кошелев В.А.* К истории. С. 54.
- ⁴⁶ *Кошелев*. Записки. С. 98. *Аксаков*. Письма. С. 604.
- ⁴⁷ *Кошелев*. Записки. С. 95.
- ⁴⁸ Там же. С. 96.
- ⁴⁹ *Кошелев А.И.* Любозный читатель! // Русская беседа. М., 1856. № 1. С. V.
- ⁵⁰ *Самарин Ю.Ф.* Два слова о народности в науке // Там же. Науки. С. 35-47.
- ⁵¹ *Чичерин*. Воспоминания. С. 260-262.
- ⁵² *Аксаков К.С.* О русском воззрении // Русская беседа. № 1. С. 84-86.
- ⁵³ *Киреевский И.В.* О необходимости и возможности новых начал для философии // Русская беседа. 1856. № 2. Науки. С. 1-48.
- ⁵⁴ ロシアの国民性、およびロシア史をめぐる『ロシア通報』と『ロシアの談話』の論争については、竹中浩「ロシア自由主義の形成過程(1)」『国家学会雑誌』、1986年6月、第99巻、第1章を参照。
- ⁵⁵ *Беляев И.Д.* Обзор исторического развития сельской общины в России, соч. Б.Чичерина // Русская беседа. 1856. № 1. Критика. С. 101-146.
- ⁵⁶ *Чичерин*. Воспоминания. С. 262-266.
- ⁵⁷ *Самарин Ю.Ф.* Несколько слов по поводу исторических трудов г. Чичерина // Русская беседа. 1857. № 1. Критика. С. 103-118.
- ⁵⁸ *Кошелев А.И.* Две статьи о железных дорогах // Русская беседа. 1856. № 1. Критика. С. 148-157.
- ⁵⁹ *Григорьев В.В.* Т.Н. Грановский до его профессорства в Москве // Русская беседа. 1856. № 3. С. 17-46.
- ⁶⁰ *Чичерин*. Воспоминания. С. 268.
- ⁶¹ *Кошелев А.И.* По поводу журнальных статей о замене обьязанной работы наемною и о поземельной общинной собственности // Русская беседа. 1857. № 4. Критика. С. 109-171.
- ⁶² Там же. С. 160.
- ⁶³ 新聞『世評』については下記を参照。См. *Цимбаев Н.И.* Газета «Молва» 1867 года // Вестник Московского университета. МГУ, 1984. Серия 8 (история). № 6. С.14-24.
- ⁶⁴ 9月14日付の第25号からは巻頭論文自体がなくなっている。また、コンスタンチンによる署名記事も姿を消している、この時期に彼はこの新聞から撤退したと考えられる。

古典的スラヴ派の言論活動（大矢）

⁶⁵ *Кошелев А.И.* Об издании // Русская беседа. 1858. № 4. С. V.

⁶⁶ *Кошелев А.И.* От издателя // Сельское благоустройство. 1858. № 1. С. 1-2.

⁶⁷ *Кошелев.* Об издании. С. V.

⁶⁸ 保守派の В.Н. Пэрнинによって「スラヴ派の頭目」と目されたコシェリョーフは政府の委員会に招かれなかった。См. *Кошелев.* Записки. С. 108.

（平成 25 年度札幌大学研究助成制度による研究成果である。）